

大森一輝著  
『アフリカ系アメリカ人という困難  
——奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』

(彩流社、2014年)

藤 永 康 政

2009年、アメリカの歴史上初めての「黒人大統領」の誕生は、「黒人」や「人種」の歴史の研究に携わっている者に大きな挑戦を突きつけた。周知のとおり、前年の大統領選の頃より聞かれ始めた「ポスト人種」という言葉は、その後瞬く間に人口に膾炙するようになったのだが、では、「オバマ」という現象でもって、アメリカ社会は、人種差別を克服したと言えるのだろうか。このような問いかけに、首肯するだけの者は決して多くない。ところがしかし、現代アメリカ社会における「黒人」について説明しようとする、それは困難を極めることになる。

本書は、再建期から現在までに至る8名の黒人知識人を中心に、彼らの「人種」との格闘の有り様を、評伝の形で考察する思想史研究である。考察の対象とされた黒人たちの知的営為が、急進性と保守性を同時に備えていたことを剔抉する著者の手腕は、鮮やかである。その議論は、上の現代的な問いかけを考えるうえでも、すぐれて歴史学的な観点からの貴重な示唆に富んでいる。これをまず述べたあと、以下では、本書の内容と主要な議論を紹介し、その後に改めて評者の意見を記してみたい

第1章(「黒人法律家が見た「メルティング・ポット」と「メリトクラシー」」)が取り上げるのは、南北戦争終結直後から20世紀初頭にかけて、ボストンの法曹界で活躍した「黒人エリート」、アーチボルド・H・グリムケとジョージ・L・ラフィンである。両者とも、人種に基づいた判断をしないことこそが、アメリカの理念を実現するとみなすことで共通の立ち位置に身をおく。著者によると、ラフィンの姿勢が明確に現れている事例が、クリスパス・アタックス記念碑の建立計画での彼の見解であった。彼がアタックスに見たのは、黒人としての功績ではなく、アメリカ革命の理想を体現したことにあった。そのようなラフィンは、「人種が混じり合うこと」(混血)を通じて実現されることを思い描くようになるのだが、それはまた、「アメリカ化」を完了していた「エリート」の在り方をモデルとし、このモデルとは異なる黒人が「淘汰」されることをはからずとも想定するものでもあった。しかし、白人が黒人から学ぶものはないと考えられていた当時であって、このような考えは一定の急進性を具えたものでもあった。またグリムケは、「機会の平等と優勝劣敗」への深い信念を持っていた。個人としての自助努力こそが、黒人の進歩の唯一の鍵だと考え、他方で「普通の黒人」が直面する問題を意識的に閉却し、黒人が特別の扱いを受けることには反対していた。しかし、グリムケの立場は、同じく「自助」を尊ぶとはいっても、「集団としての自助」を唱えるブッカー・T・ワシントンとは異なり、「カラー・ブラインド」な「個人としての自助」を重視するものであった。それは、しかし、「すべての責任は個人

が負うべきだとした点で、ワシントンよりも過酷な思想であった」(48頁)。

第2章(「黒人は「愛国者」たり得るのか?」)は、構成員の圧倒的多数が白人である、南北戦争北軍の復員軍人組織、共和国軍人協会マサチューセッツ州支部の「司令官」になったジェームズ・H・ウルフを取り上げ、黒人であることと「アメリカ人」であることのアポリアに焦点を当てる。「黒人的」な風貌を持たず、不平不満を声高に主張することもないウルフは、「人種間には何の問題もないことを示す格好のシンボル」だった。このウルフが頭角を現していた19世紀末は、南部連合の兵士が愛国者として顕彰されるのと反比例し、黒人が疎外感を深めていく時期でもあった。そのような時代を背景に、ウルフは、南北戦争における奴隷制打倒の意義と黒人兵の貢献を語り、黒人の権利が蹂躪されていることの現状を非難した。著者は、ウルフが「黒人ナショナリスト」とも親交を温めていたところに着目し、「特異な歴史を背負った集団としての団結も辞さず、しかも、そうしても、アメリカ人であることを否定する分離主義・分派行動にはならないという多元的かつ重層的な考え方」の持ち主であったと彼の立場を位置づけ、「個人」「黒人」「アメリカ人」の「三重の尊厳の統合を目指していた」(73, 75頁)と評価する。ところがその後のアメリカでは、人種を越えた愛国者の連帯というウルフの夢は容易に実現を見ず、黒人が「アメリカ」に愛国者として認められることには大きな障害が立ちはだかり続けたのであった(79頁)。

第3章(「アフリカに真の「アメリカ」をつくる」)では、アフリカへの植民を試みたアメリカ黒人(アメリコ・ライベリアン)たちとアレキサンダー・クランメルが考察されている。20世紀初頭になると、再建期の「カラー・ブラインド」な国民統合の試みが挫折し、新移民の「白人化」と黒人の排除が同時に進行していった。そのようななかであって、黒人エリートたちは、「国民」／「非国民」の境界線を「文化・能力・階級」に置き、「人種」を無視する方向で、「アメリカ人」になることを模索し始める。このような戦略が失敗したときに、彼らの目が向かった先が「アフリカ」であった。クランメルらがアフリカ植民を推奨したのは、逆説的にも、文化・能力・階級によって区別された「立派なアメリカ人だからこそ」だったのだ(89頁)。しかし、その企図が具体化される場所であったリベリアでは、現地人の政治参加が否定されていた。著者は、このような逆説の折り重なるのなかに、「カラー・ブラインド」で「文化コンシャス」な国民意識の具現化と再建期の「カラー・ブラインド主義」に酷似したものを見て、それを「究極の「カラー(だけ)・ブラインド主義」と規定する(91頁)。理想追求の果てに排除が現象するのを助けるという黒人知識人たちの悲劇的な結末は、著者によると、彼らの国民成員資格をめぐる線引きが、「「誰が」アメリカ人能れるか／なれないかに終始し、アメリカとは「どのような」ものである／あり得るのかを不問に付していたため、不毛で恣意的にならざるを得なかった」ところから導かれたものであった(100頁)。

アメリカ人であることを証明したいという「黒人エリート」たちの想いは、著者がいうように、ある種のオブセッションでもあろう。第4章(「「無色」中立のデータで「黒人」の資質を証明する」)が焦点を当てるのは、これと同様のオブセッションを抱えつつも、別の方法でこの「証明」を実行しようと奮闘した黒人の社会学者、モンロー・ワークである。ワークは、タスキーギ学院の記録調査部部長として、「黒人に関するデータすべてを集積する」ことを目的に研究・著作に従事し、その研究成果を『黒人年鑑』に編み続けた。この『黒人年鑑』は、黒人の所行や業績と考えられるものならば細大漏らさず公平に網羅し

たものであり、科学的データの客観的価値を全面的に信頼するワークの姿勢を反映したものであった。この事業は同時代にあっては幅広く高い評価を得る。しかし、ワーク自身は、「事実をどのように使うべきかにまで踏み込まなかったために反差別運動の世界」、そして「事実を基に独自の見解や理論を打ち立てなかったために学問の世界」から、急速に忘れ去られていくことになる。著者はここに彼の生涯の「悲劇」を見るのだが、そこから一步踏み込んで、この悲劇のなかにワークの「想い」を探っていく。「偏る」ことが許されなかった時代に黒人研究を始めたワークにとっては、中立を貫くことこそが黒人（である／についての）研究者としての志であった」のだ（121-122頁）。

第5章（「人種」を否定する「黒人」活動家）が取り上げるのは、新聞『ガーディアン』の発行人・編集者であったウィリアム・モンロー・トロッターである。同時代の評価と生後のそれが大きく異なるトロッターの生涯を検討するにあたり、著者は問う。トロッターは「誰」になることを求められ、自分では「誰」になろうとしてもがき、「誰」であるとしてもてはやされるようになったのか（128頁）。トロッターが目指したものは、単純明快な「人種」というカテゴリーの破壊であった。それは、他面において、ラフィンやグリムケと同じく、黒人による、黒人のための活動には反対を貫くことを意味した。トロッターはさらに、苦境のなかにいる黒人民衆に対しても、彼ら彼女らの意欲と努力の欠如を責めるのを厭わなかった。というのも、彼が求めたのは「アメリカ人」としての平等な機会であり、黒人という集団の一員ではなく「個人」として見られること」だったからである（136頁）。そのようなトロッターに広範な民衆の支持は集まりようもなかった。ところがしかし、1960年代以後になると「全面的な賛美」が現れるようになった。このときのトロッターの評価は、「個人」として生きようとした生前の彼の闘いのなかから導き出されたものではなかった。皮肉なことに、妥協知らずの真摯さが再評価された結果、装いを新たに「コミュニティ活動家」として称えられることになったのだ。著者によると、個人としてのトロッターを活動家のトロッターにしたのも、さらには彼を「ヒーロー」にしたのも、「アメリカ合衆国におけるアフリカ系人を囲う「人種」という特殊な磁場」であった（151頁）。

最後の第6章（「黒人「保守」派は何を守ろうとしたのか？」）では、シェルビー・スティールとグラン・ラウリーを中心に、現代アメリカの黒人保守派の論客の議論が批判的に検討されている。前章までの歴史学的考察は、この章において、現代アメリカのカラー・ブラインド論と直接関連づけられ、特殊アメリカ的な人種と階級の錯綜が詳細に論じられている。

まず著者は、本書で論じてきたカラー・ブラインド論が、今日の黒人保守派の主張の「原型」であるとする。しかしながら、かつての黒人エリート層が直面していたのは「黒人」扱い」しかされない現実であり、「カラー・ブラインドは、理想というよりも、未だ遠い夢」であった（163頁）。ところが、現代の保守派のカラー・ブラインド論では、「差別などもはや問題（にすべき）ではない」ものとされ、それは「激しい誤謬＝ドグマとしての人種完全廃棄論」へと変質していたのである（164頁）。

この章ではまた、黒人たちが辿りついた「隘路」を改めて辿り、その足あとを現代の黒人保守派の主張と対比するために、ボストンにおける黒人の運動の歴史的経緯と実態が詳細に検討されている。著者によると、全国黒人向上協会などの反差別団体の行動や戦略は、おおむね「個人」としての黒人の向上を目指す、黒人エリートたちの路線を踏襲するものだった。

た。しかし、集団としての黒人の苦悩と向き合う運動の流れもまた、歴史を通じてはっきりと存在していた。たとえば、「強制バス通学」の要求など、表面上、人種統合を求める運動にあっても、それは「決してカラー・ブラインドー辺倒ではなく、人種に意味を持たせてはならない範疇と人種も考慮されてしかるべき領分とを峻別」していたものであった。人種統合はそれ自体が目的ではなく、より良い環境整備のための「手段」であったのだ(173頁)。ところが、これが1980年代以後の現代的なカラー・ブラインド論では、これまでの運動の目的が歪められて解釈され、「人種主義の区別はやめるが経済的な格差とそれがもたらす不利／有利は仕方がないというカラー(だけ)ブラインドな機会不均等容認論」(177頁)へと変質することになる。

著者は、スティールなどの現代の保守主義者を、かつての黒人エリートたちの「嫡流」に位置づけ、公民権運動の意志の継承者だと自任する保守派の議論に一定の理解を示す。しかし、その保守主義は、エリートたちの考え方の規範的部分だけが「肥大化し牙となって生まれた鬼子」なのであった(181頁)。それはまた、「差別に集団的に抵抗する必要がなくなったことの反映ではなく、逆に、終わりの見えない闘いに倦み疲れた者たちの「いつまで訴え求めればいいのか」という叫び」なのである(182頁)。

従来、本書で扱われている時期の黒人思想史研究がその研究対象としてまず指を折るべきは、ワシントン、デュボイス、そしてガーヴィであろう。しかし、本書での彼らに関する記述はコラムで簡単に紹介されるに留まり、むしろオプスキュアな人物が考察の主たる対象に選ばれている。このような考察対象の選択は本書の議論と強い関係をもつ人選であり、この点に本書の強みと特徴がある。著者によると、個人の権利を主張する急進派の代表にデュボイス、集団の生活とその前進を尊ぶ保守派の代表にワシントンを描く二項対立的図式では、「ラディカル」に人種平等を求めた人々が結局「保守的」な自己責任論の罠に陥る事情をうまく説明できない」のである(22頁)。

近年の「人種」をめぐる議論では、「他者化」や「人種」、さらには「他者化」と表裏一体の形で概念化される「白人性」といった術語が、考察のなかでの具体的分析内容を欠いてしまい、それ自体が道具であり目的である空疎なものとなる傾向が強く現れている。安易な類型化を拒み、代表的な黒人知識人を敢えて詳しく論じないという本書の戦略は、この傾向に対する優れた「解毒」となっている。本書は、歴史を通じて黒人知識人たちが入り込んだ「袋小路」、「隘路」への道程を辿ることで、いったい彼ら知識人たちとアメリカ社会は何を「他者」とし、それぞれの時代においていったい何が「人種」であったのかを、具体的に示すことに成功している。

本書は、また、現代のカラー・ブラインド主義議論に介入することを明確に意図している。著者によると、近年の議論は、「[カラー・ブラインド論が]長い歴史を持っていること、(中略)最近になって起こった単なる反動ではないことを十分に踏まえていない」のである(12頁)。「カラー・ブラインド」という表現が現れた南北戦争直後まで遡って考察を進める本書の論考は、強い説得力をもっている。評者が本稿の冒頭で、現代的な問題にすぐれて歴史学的な観点からの示唆に富むと述べたのは、これゆえである。

この「カラー・ブラインド主義」の問題に関わって、著者と同じくこのような主張には長い歴史があることを論じた研究者に、アフーマティヴ・アクションに関する歴史研究



の第一人者であるJ・D・スクレントニーがいる。スクレントニーの議論では、かかる主張や思想の淵源は、平等な「抽象的普遍的個人」を構成員とみなす思想が政治体制のなかで形を結ぼうとしたとき、すなわち、近代に「市民権」が「発明」された頃にまで遡り、合衆国憲法の制定はその大きな画期であったとされている。もちろん、合衆国憲法は奴隷制が刻まれており、それは外見上カラー・ブラインドであるに過ぎない。ところが、スクレントニーが強調することは、合衆国憲法にはまた同時に「普遍化」する指向が強く存在していたという点である。<sup>1)</sup> このような議論を踏まえると、本書が検討した黒人エリートたちは、近代的普遍主義をある意味では無批判に懐胎しつつ、その後の公民権運動を準備したように評者には思われてくる。

だとすれば、本書が別掲した「人種の枷」と公民権運動の「カラー・ブラインド主義」にはさらに厳しい緊張があったように思われる。この点に関し、改めて公民権運動の時代の事実関係を評者なりに至極簡単に整理すると、たとえば、今日から考えると不思議なことに、政令や法案審議などの公的な場で、集団としての黒人に特殊な配慮を求めてカラー・コンシャスな議論を行った者は、主流の公民権運動家や団体のなかに存在していなかった。<sup>2)</sup> もちろん、本書での紹介にもあるように、M・L・キングの「発言」のなかには、集団としての黒人の過去と現在の苦境との関連性を直視することを求めるものは存在している。それでもしかし、キングの最後の運動のPoor People's Campaignという名称が如実に示しているように、彼や南部キリスト教指導者会議の「方針」は、「黒人問題」を究極的には普遍主義的な枠組みのなかで提示しようとするににあった。このような黒人アクティヴィストたちの姿勢は、その後もウィリアム・ジュリアス・ウィルソンなどの黒人知識人の議論を経由して、今日のオバマの姿勢や政策にまで通底していると考えても大過はないであろう。だとすると、著者が述べる「人種の枷」は、ここで論じられているよりもさらに強く黒人を締めつけており、「アメリカ」で彼ら彼女らが歩まねばならない「隘路」はより狭く、「黒人」たちが直面している「困難」はより厳しいことになりはしないだろうか。「カラー・ブラインド」と「カラー・コンシャス」の二元論の狭間で、前者の立場へと追いやる普遍主義の圧力が「アメリカ」には存在しているように評者には思われるのである。

では、本書が脱構築を目指し、それに成功した急進性と保守性の二元論は、近代の普遍主義という項を置いた場合に、「ブラインド」／「コンシャス」の二元論といかなる関係にあるのだろうか。このような評者の問いは望蜀の嘆である側面も強いであろう。しかし、それはまた、急進派／保守派の二元論の脱構築とならぶ、本書のいまひとつの大きな議論と決して無縁ではないように思われる。

そのいまひとつの大きな議論は、本書での歴史研究としての考察や議論が太い導きの糸となる形で、(日本における)黒人史研究に関する本質的問いかけ・提言の形をとって展開されている。著者によると、トロッターの再評価の契機は、黒人の運動が黒人コミュニティの「エンパワメント」を目指すようになった時期にあり、〈学〉の厳密さを追求した過程で起きたというよりも、むしろ〈学〉に内在する価値観が露骨に顕れる過程のなかで生

<sup>1)</sup> John David Skrentny, *The Ironies of Affirmative Action: Politics and Culture, and Justice in America* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), 22-28.

<sup>2)</sup> Ibid., 30-35.

じたものだった。著者は、このような変化を念頭に、黒人研究が人種主義を声高に告発した人々を英雄視し、その批判を嫌う傾向から無縁ではないと論じる。このような歴史的事例や、〈学〉の中立性を信じるがゆえに困難な立場に身を置かざるをえなかったワークの生涯を参照にしながら、著者は提言する。アメリカにおける研究が「人種」をめぐる価値判断と無縁ではあり得ないなか、「部外者」として黒人研究をしている日本の研究者・学生は、あらためて、何のために、何を、黒人の経験から学ぶのかという、その原点に立ち返るべきだろう」(122頁)。

抽象的な「個人」のみを社会の構成員とみなす考えを、誤解を恐れずにここで「近代のプロジェクト」とするならば、「アメリカ」はそのプロジェクトの「実験場」であった。ところが、「アメリカ」における「黒人」の存在は、このプロジェクトのなかの「残余」であった。そこで黒人史研究は、近代的理念から史実や現実を批判する「エレミアの嘆き」の役割を果たしながら、その理念の実現を求めて「闘う民衆」を探し求めてきた。わが国の黒人史研究においても、たとえば本田創造氏の研究では、かかる傾向が著しく強く、後続の研究者の多くはこれに強く魅了されてきた。しかし、70年代以後における実証研究の飛躍的な進展、ならびにアフリカ系アメリカ人の「進歩」とそのコミュニティの階層的分極化の同時進行を受けて、今日の黒人研究がかかる立ち位置に足場を置き続けることはもはや完全に不可能である。<sup>3)</sup> ならば、新たな研究の足場はどこに定めればいいのか。このように考えると「隘路」に入るのは、黒人史研究自体でもある。本書で考察された黒人知識人たちの「隘路」は、「アメリカ」に向き合いつつ、そこから排除されてきた「黒人」という存在について考察してきた黒人史研究や黒人研究の足取りと実はパラレルな関係にあるともいえよう。

このような〈学〉の在り方への問いへは、もちろん、単なる研究者の立場や規範の表明ではなく、実証を通じて答えるべきであろう。同じく黒人史研究に従事している評者にとって本書の最大の魅力は、黒人史研究全般の在り方への問いかけが考察の手法や内容と強く結ばれているところにある。「闘う民衆」を追い求め続けてしまえば、急進的デュボイスと保守的ワシントンの二元論をあらかじめ打ち立て、前者を称えるということが繰り返されてしまう。かかる二元論の脱構築を目指した本書は、考察内容それ自体が上に紹介した問いかけへの(ひとまずの)「回答」となっている。本書は、歴史のなかにある対象に優しく、歴史研究者に対して厳しい。本書が検討する対象に寄り添いながらも批判的視点を失っていないのは、この黒人史研究の動向や傾向、さらには黒人史研究者の存在論的な問いかけが、史学的考察や検証のなかで「生きている」からである。その問いかけは、今日、いまここで、黒人史研究に従事するものすべて引き受け、自問し続けなくてはならないことであろう。

<sup>3)</sup> たとえば、以下を参照、上杉忍「本田創造著『アメリカ黒人の歴史新版』は、なぜ書き直されねばならなかったのか」『年報新人文』第10号(2013年)、38-84頁。